

井伊谷城(井伊城, 大平城) (市指定史跡) (浜松市北区引佐町井伊谷) (城山公園)

井伊谷城(井伊城)はこの城山の南麓にあり、本丸、二の丸、三の丸に分かれ井伊家の居城でした。

延元元(1337)年遠江介井伊道政が後醍醐天皇の皇子宗良親王をお迎えしてより、元中2(1385)年8月10日宗良親王がこの地で薨去されるまで約50年、親王は京都と鎌倉の間であるこの井伊城を本拠として、駿河、甲斐、信濃、越中、越後、上野の国々を転戦されました。

平時にこの城山の御所の丸に居られ

夕暮れは湊もそことしらすげの

入海かけてかすむ松原

はるばると朝みつしおの湊船

こぎ出るかたは猶かすみつつ

の御歌が残されています。

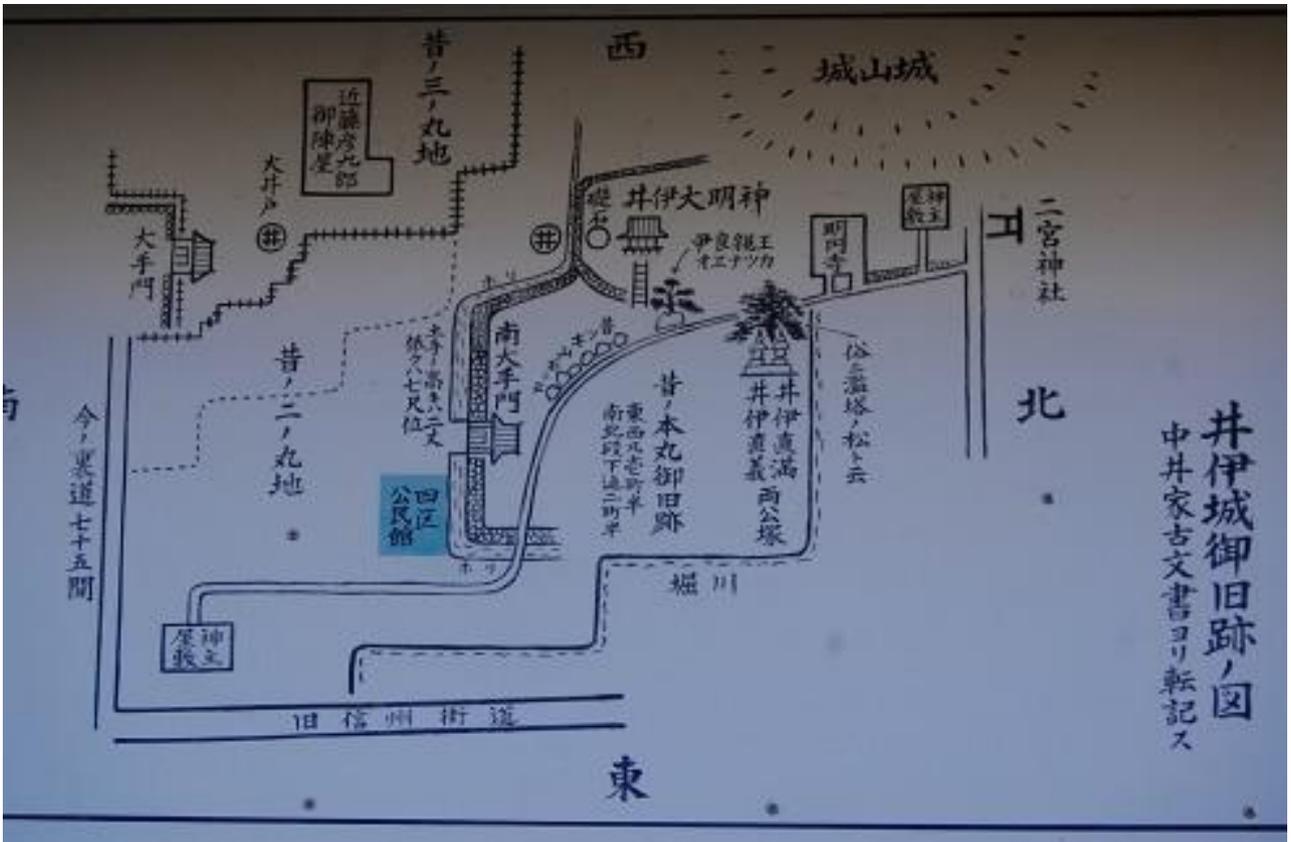
城山の一段高い所が御所丸跡で井の宮石陵があり、宮入御表門跡、搦手門跡等があります。また東山麓には宗良親王を祭る二宮神社、親王の御念持仏を祭る足切観音堂があります。

(説明看板などより)

城山には多目的研修センターの駐車場から登っていきます。城山公園として整備されていて、登城はしやすいです。



サイト「みんなカラ」による



井伊谷城（いいのやじょう）は、遠江国の井伊谷（現在は静岡県浜松市北区引佐町）にあった日本の城である。

歴史

別名・井伊城。

平安時代末期、井伊家初代当主・井伊共保によって築城されたと伝わっている。南は三方からの敵の動きが分かり、北は標高が高い山が連なっており、攻めにくい地形に造られている城である。本丸、二の丸、三の丸などで構成されていた山城である。

戦国時代以前は三岳城が井伊氏の本城だった。

南北朝時代の記録は、三岳城を「井伊城」としている。この2つの城の関係はよく分かっていないが、南北朝時代は、井伊谷城が、普段、井伊氏が戦がないときに生活していた居城で、三岳城が、戦になったときに立て籠るための詰め城だったとされる。（しかし、戦国時代の井伊家の詰め城は三岳城から、背後の山に変わった。）

南北朝時代の井伊道政は南朝の後醍醐天皇の皇子宗良親王を助け、井伊谷城に招いた。親王は道政の娘を正室として迎えている。また宗良親王の子・尹良親王も井伊谷城に生まれたと伝承されている。親王は井伊谷や遠江国についての歌を多く残しており、井伊谷城跡の山裾には宗良親王と、多遅摩毛理（古事記・日本書紀に登場する男性）とを祀る二宮神社がある。

井伊谷城は、暦応3年（1340年）に北朝方（室町幕府）の高師泰・仁木義長らに攻められ落城した。

その後、井伊氏は、駿河の遠江守護となった今川の支配下に置かれることになった。

戦国時代になると、井伊氏は今川に従軍する。

1560年（永禄3年）に21代目当主・井伊直盛が桶狭間の戦いで戦死。その後家督を井伊直親が継いだが、今川に謀反を疑われ掛川で殺害される。その後、直親の一児・虎松（のちの井伊直政。徳川四天王の一人）が城主となるまでの期間、井伊直虎が城主を務めた。

城の南にある井伊氏の菩提寺・龍潭寺は井伊谷城の防衛の役割もある。

直虎は井伊家を任されてからも身を寄せていた龍潭寺に留まることはできたが、井伊谷城に移る決断をした。理由は井伊家を継ぐのが確実な虎松に武将としての振る舞いを城できちんと学ばせる為と、城が醸し出す「戦場の一部」という雰囲気慣れさせるためだと考えられている。

今川で直虎への反感を持つ者が多くなった事と、甲斐国の武田氏が駿河国に侵攻してきたことによって、今川寄りの家臣小野道好が今川氏真から、虎松を殺害して井伊谷を掌握し、その軍勢を率いて加勢せよとの命を受け入れたことで、直虎は城主の座を奪われてしまい、直虎と虎松は龍潭寺に追いやられてしまう。しかし、武田信玄が亡くなった事で武田の力は弱くなり、徳川家康と井伊谷三人衆の力を借りて直虎は再び井伊谷城を取り戻した。

井伊直政以降は井伊氏の拠点が井伊谷から彦根に移ったので、江戸時代以降は城としての役割がなくなった。しかし、はっきりとした廃城年は分かっていない。

現在、井伊谷城は建物は残っていないが、二の丸、三の丸跡などがある。

大河ドラマ『おんな城主 直虎』の放送が決定した後、城跡の頂上までの山道が浜松市によって舗装された。

井伊谷城跡は標高110mで山頂まで約15分ほどで行くことができる。

Wikipediaによる

井伊直虎

井伊直虎（いい なおとら）は、戦国時代の女性領主。遠江井伊谷（静岡県浜松市（旧・引佐郡）引佐町）の国人井伊氏の当主を務め、「女地頭」と呼ばれた。井伊直親と婚約したが、生涯未婚であった。井伊直政のはとこであり養母。

生涯

遠江井伊谷の国人・井伊直盛の娘として誕生。

父・直盛に男子がいなかったため、次郎法師（次郎と法師は井伊氏の2つの惣領名を繋ぎ合わせたもの）と名付けられ、直盛の従兄弟にあたる井伊直親を婿養子に迎える予定であった。ところが、天文13年（1544年）に今川氏与力の小野道高（政直）の讒言により、直親の父・直満がその弟の直義と共に今川義元への謀反の疑いをかけられて自害させられ、直親も信濃に逃亡した。直親は弘治元年（1555年）に今川氏に復帰するが、信濃にいる間に奥山親朝の娘を正室に迎えていたため、直虎は婚期を逸することになったとされる。

その後、井伊氏には不運が続き、永禄3年（1560年）の桶狭間の戦いにおいて父・直盛が戦死し、その跡を継いだ直親は永禄5年（1562年）に小野道好（道高の子）の讒言によって今川氏真に殺された。直虎ら一族に累が及びかけたところを母・友椿尼の兄で叔父にあたる新野親矩の擁護により救われた。永禄6年（1563年）、曾祖父の井伊直平が天野氏の犬居城攻めの最中に急死（『井伊直平公一代記』には引間（曳馬）城（後の浜松城）主飯尾連竜の妻・田鶴の方（椿姫）に毒茶を吞まされ死亡したとされる（遠州惣劇））、永禄7年（1564年）には井伊氏は今川氏に従い、引間城を攻めて新野親矩や重臣の中野直由らが討死し、家中を支えていた者たちも失った。そのため、龍潭寺の住職であった叔父の南溪瑞聞により、幼年であった直親の子・虎松（後の井伊直政）は鳳来寺に移された。

以上のような経緯を経て、永禄8年（1565年）、次郎法師は直虎と名を変えて井伊氏の当主となった。小野道好の専横は続き、永禄11年（1568年）には居城・井伊谷城を奪われてしまうが、小野の専横に反旗を翻した井伊谷三人衆（近藤康用・鈴木重時・菅沼忠久）に三河国の徳川家康が加担し、家康の力により実権を回復した。以降は徳川氏に従い、井伊氏に仇をなしてきた飯尾氏の籠る引間城は落城（田鶴の方は自害）、元亀元年（1570年）には家康に嘆願し、直親を事実無根の罪で讒訴したことを咎め道好を処刑する。しかし、元亀3年（1572年）秋、信濃から武田氏が侵攻し、居城・井伊谷城は武田家臣・山県昌景に明け渡し、井平城の井伊直成も仏坂の戦いで敗死すると、徳川氏の浜松城に逃れた。その後、武田氏と対した徳川・織田連合軍は三方ヶ原の戦いや野田城の戦いまで敗戦を重ねたが、武田勢は当主・武田信玄が病に倒れたため、元亀4年（1573年）4月によりやく撤退した。

その間、直虎は直親の遺児・虎松（直政）を養子として育て、天正3年（1575年）、300石で徳川氏に出仕させる。

天正10年（1582年）、死去。家督は直政が継いだ。

Wikipediaによる